

## 里山を活用した新しい環境教育の取り組み —大学間里山交流ネットワークの展開—

高桑 進

### 1. 活動報告のまとめ

今年度は中部大学が大学間里山交流会に参加し、交流ネットワーク参加校が5大学に増えたことは大変喜ばしい。今後どのような展開になるかはわからないが、早稲田大学からも「一学一山運動」への参加の呼びかけがあったことを付記しておきたい。今後は、国内はもとより台湾や韓国などアジア地域の大学間でも、里山交流会を開けるようにネットワークを広げてゆきたいと考えている。

7月に金沢大学で開催された「アジア里山 環境教育研究フォーラム」に京都女子大学や龍谷大学の学生達が参加した。学生の感想をお読み頂ければわかるように、輪島地域の里山環境や超高齢化対策に取り組む限界集落の視察など、学生達は里山の置かれている厳しい現状や村落での必死の取り組みを、極めて新鮮な感覚で目の当たりにしたことは大変有意義であった。

また、9月の恒例の京都女子大学における交流会では、各大学からの活動報告会が行われた。中部大学の寺井久慈教授から中部大学の研修所がある岐阜県恵那市武並町のフィールドについて報告がなされた。この地域は「東海要素」と呼ばれる極めて特異な植物相が見られ、九州大学の「伊都の森」や金沢大学の「角間の森」はもとより、近畿地方の里山である「龍谷の森」や「京女の森」とも異なる多様な里山環境が存在することを学んだ。このことは、日本列島の多様な里山環境を、学生達が各大学の所有する森を訪問することで体験することが出来るので、大学間里山交流会の果たす役割が大きい事がわかる。さらに、中部大学が多数の市民の参加で成功させた、土岐川・庄内川「森の健康診断」活動は、1) 上流域と下流域の住民の交流が進むこと、2) 行政と市民の連携が進むこと、3) 大学と行政の連携が進むこと、4) 都市域の住民の森に対する関心が高

まること等、森林再生の道が研究者と市民の調査活動のすりあわせにより具体化されるという点で高く評価できる。今後は全国で同様な試みが進められる可能性がある。

大学コンソーシアム京都で開講して3年目の特別講座「生命環境教育論」に今年も50名ほどの他大学（立命館大、龍谷大、成安造形大、京都造形芸術大、京産大など）の学生が受講し、現地研修として京女の森を案内した（カラーページ p.25 写真1参照）

9月から11月にかけて中部大学では専門講座「里山共生考現学」が開かれた。その中で中部大学を含む5大学間里山交流セミナー「里山を還る未来」が開催された。10月13日には、「京都女子大学における生命環境教育の取り組み」という演題で発表を行ったが、セミナーに参加した聴衆は極めて熱心であり、講演内容に関していくつかの具体的な質問を受けたことは嬉しい限りである。

12月16日には、龍谷大学深草キャンパスで国際シンポジウム「里山とは何か？自然と文化の多様性」が開催された。わが国で提唱されている「里山」概念が、ヨーロッパや韓国における「里山=文化景観」を考える際にも極めて有効な概念であることが講演者から指摘された。「SATOYAMA」という日本語がそのまま世界で通用することが本シンポジウムで明らかにされた意義は大きい。その後引き続き、1泊2日で学生達の交流が、龍谷の森において昨年同様に行われた。学生達は、環境調査の一環である種子散布調査のお手伝いをした。

最後に、平成19年1月27日に金沢大学で開かれたシンポジウム「里地里山の生物多様性保全～地域の環境づくりと広域連携～」に参加して、里山の保全活動が行われている各地の事例について具体的に学ぶことが出来たことは、「里山を活用した環境教育」を進める上で大いに参考となった。

来年度からは、今年度に交流した台湾の大学や韓国等の大学間とも交流することで、アジア地域の里山の現状や保全活動、環境教育の取り組みなどについて学んでいければと考えている。

## 2. 平成18年度の大学間里山交流会の活動報告

### 2-1. 京都女子大学での里山交流会

日時：平成18年9月8日（金）13:00～ 9日（土）18:00 1泊2日

場所：京都女子大学 C校舎 205号室

「大学間里山交流会 in Kyoto」：テーマ：「各地の里山の現状と課題」について

1) 中部大学の取り組み (13:00~13:20) 報告者：寺井 久慈

2) 京都女子大学の取り組み (13:45~14:00) 報告者：井上 沙希

3) 龍谷大学の取り組み (14:00~14:15) 報告者：金田 全人

9日：京女の森観察会（京都市左京区大原尾越町） 宿泊：京都市二の谷管理舎

---

#### 活動報告の発表内容

今年の京都女子大学での里山交流会には、いくつかの行事が重なったために九州大学および金沢大学からは参加者はなかったが、中部大学からは9名（4年生：清水優子・山本絵梨子・毛受一博、桐山修平・久保壮史・島尻純一・渡辺晴輝 3年生：幾代以子・加藤美奈）の学生と1名の教員の計10名の参加があった。京都女子大学からは、井上沙希、小樋山雅子、坂岸由香利、武田聖子の4名が、龍谷大学からは金田全人、寺本昌弘、村上彩の3名が参加した。

中部大学の寺井久慈教授からは、中部大学が所有するフィールド（岐阜県恵那市武並）の環境調査結果と市民が参加した土岐川・庄内川「森の健康診断」活動の成果についても詳しく報告がなされた。

井上沙希（京都女子大学2回生）が京都女子大学の活動報告をおこなった（カラーページ p.25 写真2参照）。以下のような内容で様々な活動をした。活動の中心となったのは京都女子大学生命環境研究会である。

- 1) 4月23日、29日と八幡市にある円福寺境内に生育する孟宗竹の竹の子掘りの体験活動を行ったが、これは里山の放棄により拡大している竹林を成長する前に食い止める目的で行われた。掘り出されたタケノコの味は絶品であったことは言うまでもない。
- 2) 6月4日は八幡市にある奥村さんの田んぼをお借りして、田植えをして10月には稲刈りも体験した。今年は思いのほか豊作であり、刈り取りの後脱穀が大仕事であった。収穫量は今までで最高であった。
- 3) 7月15~16日には金沢大 アジア里山環境研究フォーラムに参加して、台湾での環境教育や環境保全の取り組みを学んだ。そして、翌日にはバスで移動する能登

里山ツアーに参加し、輪島の有名な海の見える千枚田や、金蔵村、海洋センター、春蘭の里で売り出している集落、お寺カフェを始めた名刹の慶願寺などを訪問した。このツアーで能登の里山のすばらしさを実際に体験したことや、バスの中では英語で自己紹介をしながら台湾から来た学生達と交流をはかったことは新鮮で、貴重な体験となった。輪島のまんだら村では、夕食を取りながら交流を深めることが出来た。

- 4) 8月26～27日には、京女の森で、夏休み親子自然体験教室を行った。本企画は、NPO地球環境大学主催である。参加した親子は3組であったが、京女の森に見られる自然環境を十分に楽しんでた（カラーページ p.25 写真3参照）。阪神大震災で両親を失った児童も参加したが、様々な生き物に出会える森の中で少しはいやされたのではないかと思う。
- 5) 12月9、10日には、京都の伏見区にあるパルスプラザで開かれた、環境フェスティバル2006で「大学間里山交流会」について、今までの活動を写真パネルで展示して紹介した。毎年おこなっている、しめ縄の体験は人気があった。

龍谷大学での取り組みについては、金田全人が要領よくパワーポイントを使用して報告した。発表を終えた後は、車で京女の森に移動して全員で夕食を作り、リラックスしながら懇親会を行った。翌日は、中部大学からの学生達に京女の森を案内した（カラーページ p.25、26 写真4、5、6参照）

この大学里山交流会の様子をiWebサイト上に作成した。

URL <http://web.mac.com/takakuwasusu/iWeb/Site/89644F3D-3FB6-4B3C-A298-89D307EAD33F.html>

#### 大学間里山交流会 in Kyoto に参加した感想

村上 彩（龍谷大学 2年生）

8日～9日の交流会では金沢大の交流会にも来ていた中部大学の里山と龍谷大学の里山と京女の里山についての話を聞くことができました。中部大学の話は難しい話が多くてあまり覚えていませんが、山の周りに林道を作ったり、山の利用率などを記録するなどの活発な活動を聞くことができました。また、学生に対する山の利用の呼びかけもすばらしいことだと思いました。うちの里山サークルとはえらい違いでした。見つかった希

少植物については、日本の怪しげなマニアにとられて絶滅しないことを祈ります。龍谷の里山については池ができてつあり蛙が住み着いたという話をききました。池が完成して、ガマとかが生えてきたらやはり手入れは必要だと思いました。あとそのうち誰かが水草とかを植えるような気がします。生態系を狂わせない限り、やってみたら面白いような気がします。

京女の森の話について、日本の里山はすばらしいということを知りました。ヨーロッパなどでは環境保護が盛んだが、日本人はそれより早く森林の大切さに気づいたというところに関して、確かにそうだなと思いました。3年前に北海道に修学旅行にいき、アイヌの方の話を聞いたのですが、その方は「地球に優しいという言葉がありますがこれはおかしい。人間が優しいのではなく地球が優しいのだ」と話しました。このように日本には森に生かされているという思想が古くから生きていたと今回改めて感じました。この思想はアイヌの方も話していましたが、文明社会のなかで忘れがちになります。したがって、日頃から気を引き締めなければなりません。また、これから日本の里山はすばらしいということを知った人を他の人に話す時決して日本民族はすばらしい、日本国家はすばらしいというようなニュアンスにならないように気をつけていきたいとおもいます。

月見は雨でできなくて残念でしたが、太陰暦の話は面白かったです。太陰暦についてはあまり知識が無く、NHKの「お江戸でござる」で少し見たくらいでした。太陰暦が実は日本の暦によく合うということを初めて知りました。京女の森では色々な植物を見ることができました。つちあげびを見ることができたのは幸運でした。枯れた松の大木にはまつぼっくりがついていました。最期まで生きようとしていたのだということが伝わりました。生命というものは力強いものだとおもいました。

## 2-2. 龍谷大学での里山交流会

京都女子大学と龍谷大学の学生達は、龍谷大学深草キャンパスでの以下の国際シンポに参加した後、龍谷荘に1泊して交流を深め、翌日龍谷の森で種子サンプリングを体験した。

国際シンポジウム『「里山とは何か」自然と文化の多様性』

プログラム

1) 「日本の里山の現状」 宮浦 富保（龍谷大学 理工学部教授、里山ORCセンター長）

2) 「里山と生物多様性の保護—グローバルな問題：オーストリアからの事例」

W・ホルツナー（オーストリア ウィーン農芸大学教授、環境研究・自然保護研究センター長）

3) 「江戸の市民が見た自然」

江南 和幸（龍谷大学 理工学部教授、里山ORC研究スタッフ）

4) 「韓国における里山の山菜・雑穀利用とそれに関わる文化」

パク・チョルホ（韓国 江原大学校農業生命科学大学教授）

5) 「里山：人と神と動物たち」

須藤護（龍谷大学 国際文化学部教授、里山ORC研究スタッフ）

イベント企画：「パネル展示とビデオ放映」（里山自然学習とアートなど）

日時：2006年12月16日（土）13:00～17:30

会場：龍谷大学 深草学舎 21号館603教室

#### 国際シンポと交流会の感想

大郷隆正（龍谷大学3回生）

今年のシンポジウムはオーストリアと韓国から先生を招いてのシンポジウムで、オーストリアや韓国の里山についての大変興味深い話を聞くことができました。また、会場はシンポジウムを聞きに来た人でいっぱいになりました。里山に関心のある人が増えてきているのを感じました。

2日目、私達は龍谷の森へ行きました。龍谷の森では、今年から始めた、種子サンプル回収をしてもらったり、新しく作った池、バイオトイレ、椎茸のほた木などを見学してもらいました。今回は京都女子大学の学生だけしか参加できなくて、少し残念でしたがそれでも、賑やかに交流会を行うことができ良かったと思います（カラーページ p.26 写真7参照）。

### 3. 里山関連シンポジウムへの参加

今年は、学生達も積極的に各種のシンポジウムに参加して、アジアの大学との交流が出来た。

### 3-1. アジア里山 環境教育研究フォーラム

第1部「台湾における自然をテーマとした環境教育の取り組みと成果」

日時 平成18年7月15日（土）午後1時30分～午後5時

場所 金沢大学創立五十周年記念館「角間の里」2階ホール

講演1「台湾における環境教育と自然センターの任務と成果」13:45～15:15

国立台湾師範大学環境教育研究所 周 儒教授

講演2「台湾の学校におけるESDをコンセプトとした環境教育の実践と成果」15:30～17:0

国立台湾師範大学環境教育研究所 張子超副教授

午後6時：日台里山・環境教育研究交流会

第2部 能登里山フォーラム

日時 平成18年7月16日（日）～17日（月）

16日16:00 能登里山フォーラム 於：能登まんだら村「錬成館」

「台湾から見た日本の里山、その魅力と課題」

国立台湾師範大学環境教育研究科 紀 麿倍

「能登における里山の活用とツーリズム」

星野 正光

「里山に生きる金蔵学校の挑戦」

石崎 英純

17日9:00 能登まんだら村発 輪島市、醸しの里視察 15:00 金沢着

主催：金沢大学「角間の里山自然学校」

---

アジア里山・環境教育研究フォーラムに参加して

高桑 進

アジア里山・環境教育研究フォーラムに参加した感想とその内容について述べる。

国立台湾師範大学環境教育研究所 周 儒教授は、第1部で、台湾における自然とテーマとした環境教育の取り組みと成果として、「台湾における環境教育と自然センターの任務と成果について発表された。

台湾における環境教育の発展と挑戦、環境教育の実践に対する自然センターの大切さ、世界の自然センターの発展とその流れ、台湾の自然センターの歴史、事例紹介、今後の

課題といった内容であった。

台湾では、最初の環境保護を推進する行政機関として1974年に水污染防治所が、1982年には行政院衛生署環境保護局、1986年には行政院環境保護小組、そして1987年に行政院環境保護署が設立された。

台湾が直面している環境教育の課題は、

- 1) 環境教育の理念と教師の実際の教育方法に距離がある。
- 2) 野外教育の活動において、独創力を育てることが出来ない。
- 3) 教師の環境教育の知識と能力を上げることが出来ない。
- 4) 教師達は学校で環境教育を実施することが困難であると感じている。
- 5) 社会は、上質のレクリエーション経験を求める傾向がある。

環境教育を発展させる資源が不足を指摘されていた。このような基本的な問題点の所在としては、以下の3点を上げられた。

- 1) より良質な環境教育サービスをどのように学生や教師、一般大衆に提供するか？
- 2) そのようなサービスはどこで提供できるか？
- 3) 新「9年一貫教育」がスタートして、大量の環境教育需要が発生するが、満足出来る環境教育を提供できるか？

環境教育の実践には、自然センターが極めて重要である。そのような施設としては、環境学習センター、環境教育センター、自然センター、戸外環境教育センター、保護センター、生態センター、生態農場、田野学習センター、田野の家などがある。

自然センターが設立された理由としては、生活と学習の結合を強調する教育改革、日本の小中一貫教育と同じ9年一貫教育の新課程、より上質のレクリエーション経験を求める傾向、環境教育は学校教育の中で重視されていない現実があることを指摘された。教育を通じて初めて国民に価値と行為が作り上げられるので、どのようにして良質のサービスを提供するかが課題である。

自然センターの定義は、環境教育資源を持った特色的土地・区域において、環境教育の専門的人力、専門課程とそのプログラム、適切な環境資源を整合して、顧客である児童生徒、学生、一般市民に対して専門的な環境教育サービスを総合的に提供するとともに、教育、研究、環境保全、文化、レクリエーションなど多様な目標を達成する施設であ

る。

自然センターの存在意義は、

- 1) 都市と地方の緩衝地帯であること
- 2) 地域住民に身近な自然体験を提供
- 3) 環境教育の目的達成のため：生態的な知識持って行動できるようになるとともに、責任を持って環境と調和的に生活できること。

自然センターの利用者は、宿泊型・日帰り型とも学校団体が一番多く。その中でも小中学校生が一番多い。

たとえば、Pocono Environmental Education Center では、年間2万年の利用者があり、その75%が学校関係者である。日本の「国立那須甲子初年自然の家」の利用者の8割が小中学生である。自然センターの構成要素として、人と施設と管理運営がある。

世界自然センターの歴史としては、1892年に世界最初の野外センターであるField Study center がイギリスのエディンバラに設立された。また、1946年にはイギリスで最初の宿泊型の野外学習センターが設置された。全国で300カ所以上あり。

アメリカでは、1913年に最初の自然センターとなるFontenelle Forestが設置された。北米の自然センターのほとんどは、1960～1970年代に設立され5000カ所以上ある。

日本の最初の自然センターは、1948年に設立された清里森林学校である。日本の野外環境教育施設は各地に約1200カ所設立された。

台湾の自然センターは、環境教育センター、自然教育センター、環境保護教育展示センター、水土保持戸外教室など段階的に発展してきた。今では、環境学習センター、自然センター、自然環境センター、生態農場、市民農園、戸外学校、自然教室などがある。

台北にある湿地センターである開渡自然公園の紹介あり。ここは台北市政府建設局が管理して、運営組織は財団法人台北市野鳥学会である。特色は、淡水の河口から約10キロに位置し、面積約57ヘクタール。平原湿原、河岸湿地と河口湿地の生態的特色を持つ。秋冬期には、渡り鳥の重要な中継地点となる。

その使命は、湿地生態系環境の保全保護と教育、研究およびレクリエーションの場所の提供である。湿地公園として、以下のことを行っている。

- 1) 保全活動：湿地生態の生物多様性を復元

2) 研究活動：湿地生態の建久と記録センター

3) 教育活動：環境教育学習センター

4) レクリエーション活動：高品質のエコツーリズムの場所提供。

2番目の事例として、個人所有の二格山自然センターについて紹介あり。ここは、台北石碇郷格頭村に2001年に創立され、面積は127ヘクタール。特色は、台湾北部中低山の森林環境である。使命は、環境教育運動に尽力し、人と自然の調和的な未来を築くこと。

3番目には、有機稲場を紹介された。台湾中部の苗栗苑裡にある台湾初の民間企業と非営利組織との連携による自然センター。長年有機栽培に力を入れてきた山水米会社と観樹教育基金会とが連携した。100%有機栽培の目標で、有機稲場を設立。台湾のお米産業の活性化に寄与することを目的とする。

どのようにして良質の環境教育を実践するか。

1) 質の良い環境教育と活動プログラム

2) 専門的な先生・指導者と活動のリーダー

3) 環境と資源の相対と施設との適合

4) 経営管理の目的と経験の適合

5) 活動を学校の儒御油に符合させること。あるいは消費者に有意義なレクリエーション経験をさせること。

6) 安全と環境に優しい施設と操作

最後に、趨勢と挑戦と題して、以下の点を指摘された。

1) 政府の政策と法規

2) 設置の企画標準

3) 経営単位の明確かとビジョン

4) 自然センターに必要な専門的人材

5) 専門的製品の制作と提供

6) 友好的に消費市場に連結していること

続いて、同じく台湾師範大学環境教育学科の張子超副教授が、台湾の学校におけるESDをコンセプトとした環境教育の実践について講演された、その内容は持続可能なキ

キャンパス改修計画の意義や主題、及び持続可能な教育の実践である。

台湾教育部〔省〕は2002年から「持続可能なキャンパス改修計画」をスタートさせ、毎年100校に対してキャンパス改修計画の補助金を出している。過去5年間で約400校が補助を受けて、改修すると同時に持続可能な開発のための教育を実施し大きな成果を上げているという。

#### (1) 学校は持続可能な開発の教育基地であり執行センターである

台湾教育部の策定した「グリーンキャンパス推進計画」は、進歩、安全、衛生、健康及び人間性あふれる学習環境空間を創造すること、伝統的な閉鎖的環境と窮屈な管理体制を打破することによって、学校と地域の共有意識を整合し、地域デザインを設計し、エコツアー等の課題を展開し、改修された学校環境を地域の特色を生かした公共活動空間にすることである。

キャンパスの緑化技術関連する産業技術に応用・転化し、緑化産業の利益促進、内需の拡大等を進めて、屋内の契機を効果的に刺激することで、台湾の持続的な発展と環境教育の積極的な意義と教育改革の目的を実現しようしている。

#### (2) 持続可能なキャンパスは、生態環境ハードウェアの企画と教学の実現の双方に配慮する

持続可能なキャンパスのハードウェアとは、「生態環境の創造と維持」「緑化建築建設」の二つが含まれる。

まず、学校の位置する地域や文化、歴史、生態などの特徴をよく理解し、新たに多様なキャンパス環境を創出する。ソフトウェアでは、「九年一貫」教育を調和的に実行し、各学校の特色に応じてキャンパス環境を改造すると同時に、各学校の授業において特色ある教材を創出する。将来的には、近隣の学校がおのおのの特色ある教育を連携させて、環境教育ネットワークを形成することを目指している。

次に、持続可能なキャンパス改修計画の発展主題として、資源循環、エネルギー循環、生物が多様な環境づくり、生態循環とグリーン建築であると述べられた。

#### (1) 資源とエネルギーの循環

具体的なテーマとしては、

- ・資源回収とリサイクル（廃棄物の資源化とごみの量的削減）
- ・浸透する表面舗装（学校敷地内では浸透性のある表面舗装を増加させる）

- ・雨水と中水再生利用（植物への散水、洗濯、ビオトープへの利用、地下水槽への備蓄など）
- ・ビオトープによる水質浄化システム、エコエネルギーの利用（風力を活用した井戸、風力を活用した水車、太陽エネルギーを活用したキャンパスの夜間照明など）省エネルギー施設、節水装置など。

## (2) 静物多様性に配慮した環境づくり

- ・表土改良、親和的な柵（植物を使った高低差と隙間のある柵）
- ・多層のエコ植栽（在来の植物を活用した多層植栽と立体的緑化）
- ・エコ景観的なビオトープ（水辺の護岸、植栽、生物、水質管理の生態学的設計）

## (3) 生態循環

- ・落葉と生ごみで作られた堆肥、教学の畑（キャンパスの空き地を活用した有機栽培の畑）
- ・共生動物の養殖

## (4) 健康建築

- ・健康に配慮した建築材料と自然素材の使用
- ・室内環境の改善（室内の音環境、光環境、温熱環境、換気、湿度管理など）

最後に、持続可能な教育の実践について述べられた。

持続可能な開発のためのキャンパス改修計画は、持続可能な教育実践でありいかの4つの側面がある。

### (1) 教育の主題と内容の充実

持続可能な開発のためのキャンパス改修計画の主題にあわせて、学校は教育主題を大量に拡充した。

- ・キャンパスの生物多様性 ・代替エネルギー ・文化 ・水資源 ・植栽
- ・物質循環 ・水循環 ・自然水質浄化システム・キャンパス空間デザイン

### (2) キャンパス区間と施設の活性化

持続可能なキャンパス改修計画により、

- ・キャンパス緑化率の促進：23.4% → 35.8%
- ・キャンパス透水率の促進：12.8% → 22.6%

- ・落ち葉と生ごみの堆肥を教育プログラムに利用
- ・補助を受けた学校の33.2%は代替エネルギー計画に着手
- ・雨水と生活用水を回収、再利用：10.6%の学校

### (3) 多様な学習戦略への応用

- ・補助を受けた学校の8割が多様性豊かな環境づくりと施設整備を達成。
- ・他校と経験・成果を交換・共有して効果を上げている。
- ・自然と生活の科学技術、言語、芸術と人文的な学習領域に溶け込んでいる。
- ・理念は、各種学習戦略と接合している。

例：科学過程技能、学術表現、言語創作、行動、手工芸、解説、メディアへの応用、野外活動、自然体験、植栽、動物養殖及びゲームなど

### (4) 持続可能な理念の地域における行動実践

学校で使う水の循環利用、エネルギー節約、資源分類と回収、キャンパスの生物多様性確保を除いて、大部分の学校において持続可能なキャンパス改修計画を地域との結合により実施し、地域の産業を発展させ、文化を促進し、生態環境を保全保護し、持続可能な開発のための理念を実現する。

## 感想とまとめ

全体として印象に残ったことは、台湾教育部〔省〕は2002年から「持続可能なキャンパス改修計画」をスタートさせ、毎年100校に対してキャンパス改修計画の補助金を出し、過去5年間で約400校が補助を受けて、改修すると同時に持続可能な開発のための教育を実施しているということからもわかるように、台湾の大学における環境教育の実践は極めて具体的であり、我が国の大学における環境教育が講義中心なことに比べて格段の相違があると感じたことである。

日本でも大学のキャンパスの自然環境を活用した、リアルな環境教育の展開が求められている。その意味で大学間里山交流ネットワークに入っている大学での取り組みは先進的な取り組みと評価できる。

また、台湾でも、近年小学校と中学校の9年一貫教育が進められているようだ。

これからの課題としては、地域と大学の連携をどのように進めていくかが問題である。地域の特性を生かした特色ある持続的な開発を進めるには、能登ネットワークに見

られるような地域のリーダーを結びつけるネットワークの形成が大きな役割を果たすものと確信した。

---

フォーラムの翌日、7月16日と17日は、参加者全員で輪島地域の里山を廻るツアーがあり、輪島の千枚田や様々な地域起こしをしている現場を見て歩く事は、大変有意義な経験であった。参加した学生は、京都女子大学からは井上美沙、亀田富美が、龍谷大学からは金田全人、村上彩の計4名であった（カラーページ p.26 写真8参照）。学生達は初めて見る輪島の千枚田や、金蔵寺や昔の食事を出す春蘭の里やお寺カフェのある慶願寺など、地域に残された文化財や活性化に取り組む人々と直接話し合えたことは大いに感銘したようである。したがって、このような各地の里山の現状や取り組みを体験することは、費用がかかる点が課題であるものの今後も継続することが望ましい。

このフォーラムと台湾からの参加者との交流についての様子をiWebサイトに作成した。

<http://web.mac.com/takakuwasusu/iWeb/23603932-4E46-4FF4-9567-399F8F2D9FA0/766F153B-66E0-425D-854B-B0300E8C7234.html>

#### アジア里山フォーラムに参加した感想

村上 彩（龍谷大学 2回生）

一日目の講演会では、台湾の里山について詳しく知ることができました。台湾は亜熱帯で、生物の種類が日本より多いと聞きましたが、これにより台湾の里山にはどんな鳥がいるのか興味を持ちました。また、台湾の山は私有、国有で、自由に立ち入ることができないとききましたが、これは人々の考え方を決める要素だと思いました。私の場合、幼いとき頻りに地元の山に入り山菜を採ったり、生物を観察したりしてきたので、生物はある程度得意科目でした。受験や学力低下問題と環境教育が対立しているという話もありましたが、まず自然を知り、さらに詳しいことを知るために、いろいろな本などを見ていくうちに学習意欲が高まり、その結果、学力が向上すると思います。

今、グローバル化という名の下、ファストフードなどのアメリカ式の食生活が世界中に広まっていますが、これに対抗して、台湾では、100%お米を楽しもうという動きが

あることを今回はじめて知りました。フランスではマクドナルド襲撃事件があり、香港のWTOではデモ隊が海に飛び込むなど食に関する安全と文化を守ろうとする動きもあります。こうした中、日本はまず、農業の地位を見直し、食料の自給率を上げ、米国産牛肉の輸入再開などのいきすぎたアメリカ追従をやめるべきだと思います。ただし、文化の見直しを理由に女性などのマイノリティーを苦しめたり、いきすぎた国粋主義に走ることだけは絶対に避けるべきだと思います。

台湾からの留学生との話で、台湾といえども冬は気温が下がるということを知りました。台湾は亜熱帯なので、一年中暑いという偏見があったので、意外でした。また、留学生にとって、日本で暮らす中で、一番苦労したのが敬語の使い方と言っていましたが、コミュニケーションにおいて重要なのは言葉遣いという技術ではなく、相手を大事にする思いだとおもいます。使いにくい敬語はこれからいわゆる「日本語の乱れ」によってどんどん簡素化されていくとおもいます。しかし、外国語である日本語で日常会話ができるというのはすごいと思いました。私は語学が苦手で、センター試験では90点台をとり、TOEICでは200点くらいをとったので、どのような勉強方法をしたのかと思い、尊敬しました。北朝鮮のミサイル問題や自衛隊、靖国問題やイラクでの拉致事件等に関して日本のメディアはかなり偏った報道をして、日本の国民や人民を煽り立てているので、外国のメディアを読むことにより頭を冷やすことが重要だとおもいます。そのためには、語学力を身につけなければなりません。留学生も大学で新聞を読んでいると思いますが、あたかも日本の近海に落ちたような言い方や、やられる前にやれというような発言についてどう感じたのだろうかと思います。

肉や魚を使わない食事について、宗教上の理由ではなく、食料安全の理由で重要だとおもいます。牛一頭を育てるのにその何倍もの穀物が必要だということを高校時代に使った下関市立大学の赤本で知りました。また、これは、今使っている英語ⅡCの教科書で知ったのですが、マグロなどの魚は取りすぎにより数が減り、このままいくと絶滅するそうです。日本の人口はこれから減るそうですが、世界の人口は爆発的に増えており（これは世界的な男尊女卑のせいでもあるが）自らの快樂のために非効率な食糧生産を行ったり、乱獲し大量廃棄することにより今後一切魚を獲ることができないような状態にすることは現実的ではありません。

金蔵学校について、行政が一方的な地域活性化をするのではなく、その地域が自主的

に自らのニーズにあったことをすることが重要だと思いました。私の地元では地域の要望に全くあっていないものを無計画に作り、借金が増えました。夕張の事件もおなじです。また、水争いを避けるために池の水がなくなるのを竜の彫刻のせいにするのは画期的だと思いました。今現在だと、そのような柔軟で理性的な態度はとらず、相手に対する非難、中傷、攻撃に専念すると思いました。これは教育原論Aで聞いたのですが、昔は、精神病患者を病気だといわず、キツネなどのせいにして、周りはある程度理性をたもっていたそうです。

### 3-2. 『里地里山の生物多様性保全～地域の環境づくりと広域連携～』シンポジウム

金沢大学自然学校シンポジウム

『里地里山の生物多様性保全～地域の環境づくりと広域連携～』

日時：2007年1月27日（土）13:00～17:30

会場：金沢大学 大学教育開放センター2階会議室

コーディネーター：松田裕之（横浜国大）

◇基調講演

「持続可能な農林水産業を問う～生物多様性の視点～」

嘉田 良平（アミタ持続可能経済研究所）

◇話題提供

「コウノトリの試験放鳥と野生復帰に向けた取り組み」

内藤 和明（兵庫県大、コウノトリの郷公園）

「トキの野生復帰と里山・棚田の再生」

本間 航介（新潟大）

「渥美半島の風力発電問題」 市野 和夫（六条潟と三河湾を守る会、元愛知大）

「たんぼでカモを守る～農家と一緒にふゆみずたんぼ～」

田尻 浩伸（(財)日本野鳥の会、加賀市鴨池観察館）

「琵琶湖周辺域の水田地帯を利用する魚類の保全研究とその実践」

金尾 滋史（多賀町立博物館、滋賀県立大）

「石川県の里地里山の現状と金沢大の取り組み」

中村 浩二（金沢大）

主催：金沢大学「角間の里山自然学校」、金沢大学社会貢献室

共催：金沢大学21世紀COE「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測～モニタリングネットワークの構築と人為的影響の評価～」、石川県、さとやまいしかわパートナーズ（事務局：石川の森づくり推進協会、いしかわ国際協力研究機構（IICRC）

『里地里山の生物多様性保全～地域の環境づくりと広域連携～』シンポジウムの感想

高桑 進

最初に、嘉田良平氏（アマタ持続可能経済研究所）による基調講演「持続可能な農林水産業を問う～生物多様性の視点～」が行われた。氏はなぜ「農業の持続可能性」を問うのか、でわが国の農林水産業はその持続性、循環性、環境保全性を喪失していると指摘し、今後の日本の農業の見通し、農業の地域社会に取っての課題について講演した。その中で、自然産業づくりとしての農山漁村の再生を提案された。その具体的な提案内容はアマタ持続可能性経済研究所編の「自然産業の世紀」（2006）に解説されている。

その後、各地で行われている生きものたちの生息環境としての里地里山を保全・再生・創出する事例の報告が行われた。最初に内藤和明（兵庫県大、コウノトリの郷公園）氏が「コウノトリの試験放鳥と野生復帰に向けた取り組み」について、続いて本間航介（新潟大）「トキの野生復帰と里山・棚田の再生」について講演が行われた。コウノトリにしろトキにしろ、野鳥を昔のように自然界に復元するには多くの人々の協力や長期的な計画が必要であり、失った環境を取り戻すには大変長い時間がかかること、そして本当の意味での自然復元は出来ないことを明記すべきだとの指摘があった。市野和夫（六条潟と三河湾を守る会、元愛知大）氏からは「渥美半島の風力発電問題」について、風力発電機の設置は野鳥の渡り道にぶつからないよう慎重な対策が必要であるとの指摘がなされた。田尻浩伸（財）日本野鳥の会、加賀市鴨池観察館）氏は、「たんぼでカモを守る～農家と一緒にふゆみずたんぼ～」と題して講演され、冬に田んぼに水を張ることで、有機米の生産と野鳥の保護が両立することを示された。金尾滋史（多賀町立博物館、滋賀県立大）氏は「琵琶湖周辺域の水田地帯を利用する魚類の保全研究とその実践」において、水田を産卵場、生育の場とする日本の淡水魚類保全のための水田整備農業が大切であることを指摘された。数十匹のフナの稚魚を心的に田んぼに放ただけで、数ヶ月後には大量のフナが繁殖した事実は、農民達を大いに刺激したことを特筆すべきである

う。

最後に、中村浩二（金沢大）氏が「石川県の里地里山の現状と金沢大の取り組み」について紹介した後、今後とも里地・里山の生物多様性の保全是限界集落と呼ばれている地域の振興と深い関わりがあることや農業に取り組むことが大切であることを再認識すべきであると述べられた。里山に大きな関心が注がれていることは、参加者が200名を越えていたことから伺える大変有意義なシンポジウムであった。

### 参考文献

- 1) 武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史（編）（2001）「里山の環境学」東京大学出版会
- 2) 広木詔三（編）（2002）「里山の生態学」名古屋大学出版会
- 3) アミタ持続可能経済研究所（2006）「自然産業の世紀」創森社